

海・山・川をつなぐ地域の力

福岡県北九州市門司区 一般社団法人海の郷





北九州市の関門海峡を臨む門司駅から山を越えた瀬戸内海側にある、新門司海浜緑地公園の海岸において、一般社団法人海の郷（代表・小牟田尚美さん）による毎月恒例のビーチクリーン活動が行われた。時折風雨が吹き付ける天候のなか、20人ほどが集まりトングとごみ袋を手に海岸へ向かった。風光明媚な海岸だが、足元にはペットボトルや漁網、釣り具など様々ながみが打ち上げられている。

参加者の1人で、環境省の資源循環専門員でもある金藤さんは、小さなプラスチック片を見て「おそろく、牡蠣棚で使われるパイプの継ぎ目ではないでしょうか」と話しながらトングで拾い上げていく。また、門司障害者地域活動センターの鳥井さんは、施設の障がい者とともに参加し「障がいのある人は人とのつながりが大切。一緒に活動すると声をかけてもらえる」と、地域の方と交流する機会になっているようだ。なお、海の郷の活動は今年度、「TOTO環境基金」の助成を受けており、この日はTOTO株式会社の古田さんも初めての参加。「すやっきいの活動が興味深く、地域と密接に連携している印象を受けた」と話す。

海岸を歩くと、波打ち際に打ち上げられたアマモが目にとまった。アマモは浅い海に群生する海草で、様々な生き物が産卵や生育の場として利用している。近年では海岸に砂が戻り生き物の姿も増えてきたと、海の郷代表の小牟田さんはその変化を実感しているようだ。

小牟田さんは以前、伊川市民サブセンター館長として地域づくりに携わっていた。当時は、自然環境への関心よりはむしろ、人と人とのつながりづくりや、制度につながらず困っている人たちへの支援に向き合っていた。やがて、伊川地区の豊かな自然や暮らし、歴史に触れる中で、伊川地区に惚れ込み「この地域で何かできないか」と考えるよう



になった。

その一つにコミュニティバスがある。伊川地区では公共交通が少なく、高齢者の買い物や通院の手段を確保するのは切実な課題だった。そこで、小牟田さんが、伊川地区の隣町にある「門司障害者地域活動センター」へ相談し、日中使用していない送迎車を活用したバスの運行が始まった。伊川地区と門司駅を走るこのバスは、2021年6月から現在も運行を続けており、運転手や乗降の介助も施設が担い、地域の高齢者に欠かせない移動手段になっている。

こうして地域課題に取り組み続けた小牟田さんは、館長を退いた後も、活動が続けたいという思いから海の郷を立ち上げた。

活動当初は2019年3月に閉校した伊川小学校を拠点とした。同校は、2021年9月に閉校後ようやくまた災害時の予定避難所に指定。そのもとで、地域にある「みろく福祉サービス」がデイサービスと食堂を開設し、再び人が集まる場所となった。

小牟田さんは、デイサービスが午後の開設だったことから、午前中を地域のために活用できないかと考え、「外出のきっかけをつくり、健康づくりや交流につなげたい」という思いから、2024年に「いかわ学校」を始めた。健康づくりや自然体験などの講座を開き、校庭には畑も整備し、小学生の農業学習や、デイサービス利用者との交流会を行った。こうした活動から、住民の方々から学校への関心と防災意識が徐々に高まり、学校で行う防災訓練に多くの住民が集まるようになった。

海の郷の活動はさらに、海と山とのつながりを考え、竹林の整備にも取り組み、山から海へ豊かなミネラルが届く環境を守ろうとしている。また、地域の不耕作となった畑



を借り受け、誰でも気軽に参加できる畑として、ナスやキュウリ、サツマイモなどを育て、地域住民との交流も広がっている。

また、海の郷の活動は福祉とも結びついている。海の磯焼けをなくす玉「すやつきい」は、漁業関係者から譲り受けた牡蠣殻を細かく砕き、粘土と混ぜて泥団子状に丸めて、窯で素焼きしたものだ。表面にできる無数の穴がヘドロの原因となる硫化水素を吸着し、潮の満ち引きと日光によって分解を繰り返し、海をきれいにしていく。この泥団子づくりは、障がいのある方も取り組める作業であり、小牟田さんは将来、仕事につながる仕組みになればと願う。

こうした活動を支えるスタッフの末広さんと藤田さんは、「最初は地域の人との距離もありましたが、活動が続けるうちに信頼関係ができ、防犯パトロールにも参加するようになりました」と振り返る。活動を手伝う人も少しずつ増え、「これまでの人生より、人との出会いがずっと増えました」と話す。

取材の最後、海の郷のメンバーとともに、地区を流れる大坪川の河口へ向かった。波が打ち寄せる河口に、網袋に入れた「すやつきい」をメンバーが一つずつ下ろしていく。河口を歩きながら大波に打ち上げられたアマモを見て、メンバーが足を止めた。

アマモの葉に透명한コウイカの卵が連なり、目を凝らすと小さなコウイカの赤ちゃんの姿が見える。

「この海岸が故郷だよ」

小さな営みの積み重ねが、大きな海に命の源を育んでいく。

【連絡先】一般社団法人海の郷

<http://www.umi-sato.com>